

この二つの型はそれぞれの zooid に固有のものではなく、全く生育条件によっており、bud 形成開始の時期および開始より終了迄の期間もまたその影響を受ける。また、thorax と BA の結合による zooid および有性生殖のみられる zooid では、生育条件の低下に伴なり再生の型の誘起が著しい。

### アカウミガメの 1 卵性双子

藤原正武 (東京学芸大)

1961 年に鹿児島県屋久島でアカウミガメの 1 卵性双子 3 例を採集した。2 例は同一腹で産卵後 10 日、1 例は別腹で 22 日のものである。3 例ともに、双子は互いに近接して位置するが完全に独立しているが、卵黄嚢を共有している。発育の程度はどの双子も揃っていて、正常発生の子と比べて遅れてはいない。10 日のものでは四肢が突起をなし、小さな尿嚢を生じている。22 日のものは四肢に関節を生じて指の分化が始まり、背甲が骨板の数えられる程度に発達している。

双子の生ずる原因は、①産卵時の卵は原口を有する囊胚であること、②卵黄が動物極側で液化しているため胚盤下腔が著しく大きいこと、③卵は深さ 50cm の堅穴中にうみつけれられること、④双子はいずれも堅穴の底部から採集されたことなどから考えると、卵が産みおとされて穴底に達したときの衝撃によって原口に亀裂を生じたためと思われる。

### カブトエビ *Triops longicaudatus* Le CONTE の性比とその生活史について

秋田正人 (長野県・松本深志高)

本年度採集したカブトエビの雌雄性を卵嚢の有無により調べた結果、松本 1,333 匹、鈴鹿 155 匹、堺 171 匹のものは全部 ♀ のみで、沼津で採集したものは ♂ 114 匹、♀ 76 匹、鳥取では ♂ 49 匹、♀ 36 匹で ♂ が多かった。背器官、背甲、第 1 肢の flabellum、♀ の第 2 肢の第 6 内枝の形、無肢体節数等において松本、鈴鹿、堺産と沼津、鳥取産とは異なることがわかった。分類学的にはすべて同一種とされているが、以上の諸点からあるいはわが

国のカブトエビには地方的に 2 系統の個体群があるのではないかと考えられる。松本産を室内で飼育し、卵を得て乾燥させ、2 週間後に水を入れると孵化して ♀ のみを生じた。カブトエビの発生には従来乾燥が必要であるといわれていたが、著者は最近卵を乾燥させずに水中に入れておいても発生するもののあることを認めた。

### ラット肝抗原組成の再生に伴なり変動

佐藤明直・鎌田論珠 (京大・理・動)

ラット肝ホモジェネートから超遠心分画法によって集めたマイクロゾーム分画をウサギに繰返し注射すると、抗肝マイクロゾーム血清が得られる。肝マイクロゾームの Na-DOG 可溶性分画 (D 分画) は、上記の抗血清に対して寒天ゲル内で 7—9 本の沈降線を示すが、そのうち少なくとも 4 本は肝 D 分画特異的抗原によるものである。再生中のラット肝 (部分的肝切除を行なってから 10 日目) のマイクロゾーム D 分画では、これらの肝特異的抗原はいずれも検出されなかった。吸収して交叉反応性を除いた抗血清を使うと、この事は一層明りょうとなった。又、ラット血清に対してウサギに作らせた抗血清との反応では、正常ラット肝には明らかに検出される二つの血清蛋白抗原のうちの一つは再生中の肝には検出されない。これらの事実から、再生中の肝ではある種の蛋白の合成能力が低下していると考えられる。

### 純系マウス腎マイクロゾームの抗原成分

藤井建男・岡田節人 (京大・理・動)

純系マウス BALB/c の腎マイクロゾーム分画に対するウサギ抗血清を作り、これと BALB/c の腎臓・肝臓及び脾臓との反応を寒天内沈降反応によって見ると、腎マイクロゾームのデオキシコール酸可溶分画とのみ反応する少なくとも 4 本の沈降線が見られる。この沈降線は BALB/c の腎特異抗原によるものであると考えられる。さらにこの抗血清と他の系統からえた腎マイクロゾームのデオキシコール酸可溶分画との反応を見ると、A/Jax においては BALB/c とすべて共通の沈降線が見られるが、C3H および C57BL/6 においては、沈降線が常に 1—2 本少な